

第1回 海洋立国推進功労者表彰受賞者リスト

～「1. 海洋立国日本の推進に関する特別な功績」分野～

(普及啓発、科学技術振興、産業振興、地域振興など広く海洋に関わる特別な功績)

(五十音順)

氏名・名称	年齢	所属等	功績事項
キョウトフリツ カイヨウ コウトウ ガッコウ 京都府立海洋高等学校	-	京都府	(総合的な海洋教育) 平成2年に全国に先駆けて学校名に「海洋」を取り入れ、平成15年には海洋科学科、海洋工学科、海洋資源科に学科改編をし、新しい海の時代の「海洋教育」としての性格を強くした。特に海洋科学科は水産・海洋系の専門高校として初めての進学系学科であり、上級学校への進学及び将来の海洋スペシャリスト育成など、幅広い進路を実現させた。
クリ バヤシ タダオ 栗林 忠男	71	慶應義塾大学 名誉教授	(総合的な海洋政策に関する提言) 昭和50年代後半から、海洋に関する総合的な政策枠組の必要性を提言。平成14年以降は、海洋基本法に関する主要な検討組織にとりまとめ役として参画し、平成19年の海洋基本法成立に貢献。同法成立後は、総合海洋政策本部参与会議座長として、海洋基本計画策定に当たり助言
コモリ ヨウイチ 小森 陽一	41	作家	(海洋に関する創作活動) 「海猿」、「トッキュー!!」、「我が名は海師」等の漫画やそのテレビ化・映画化を通じ、これまでほとんど注目されることのなかった海の安全や治安の問題、さらにはこれに関わる官民の関係者の取組みに関する国民の意識喚起・理解増進に大きく貢献
ユハラ テツオ 湯原 哲夫	64	東京大学サステイナ ビリティ学連携研究 機構特任教授 海洋技術フォーラム 代表幹事	(海洋技術政策に関する提言) 平成17年に「海洋産業立国」の思想の普及を目指し、産学官の海洋関連機関からなる「海洋技術フォーラム」を結成し、同フォーラムの代表となる。以降、同フォーラムの活動を通じ、新海洋産業創出のための研究開発課題、人材育成の必要性等について、第三期科学技術基本計画、海洋基本法、海洋基本計画等、我が国の海洋関連の政策策定に対して提言を行う。

※いずれも「普及啓発・公益増進」部門からの受賞

※年齢は平成20年7月1日現在

第1回 海洋立国推進功労者表彰受賞者リスト
 ～「2. 海洋に関する顕著な功績」分野～
 (海洋に関わる各部門の顕著な功績)

部 門	氏名・名称	年齢	所 属 等	功 績 事 項
海洋に関する科学技術振興部門	アオキ タロウ 青木 太郎	61	(独)海洋研究開発機構 海洋工学センター 先端技術研究プログラム プログラムディレクター	(海洋探査技術の開発) 日本で初めての本格的な大型水中無人探査機「ドルフィン3K」(3,000m級)及び世界最深部マリアナ海域の海底に到達した無人探査機「かいこう」(11,000m級)を開発し、「ナホトカ号」調査、「対馬丸」「H-IIロケット8号機」調査に大きく貢献を果たした。また、自律型巡航探査機「うらしま」(3,500m級)を開発し、平成17年には距離317kmを連続航走し世界記録を樹立した。
水産部門	キサ カタ スイサン ガツキョウ 象潟水産学級	-	秋田県漁業協同組合南部 総括支所象潟支所所属の 研究グループ	(水産資源の増殖) かつて2万トン近くあったハタハタ漁獲量が72トンまで激減したため、漁業者が自ら資源管理等に取組みハタハタ資源を着実に増加させてきた。特にその中でも本会は現場に根ざした独自の工夫により、古網等を利用したハタハタの産卵場造成など、水産業の振興に大きく寄与している。
海事部門	ミナミザキ クニオ 南崎 邦夫	80	(株)コンプロータック 代表取締役社長	(造船の技術開発) 昭和41年に世界初の20万トン級タンカー「出光丸」の建造に大きな役割を果たしたほか、純国産技術による新たなLNG船を開発するなど、我が国の船舶建造技術の向上に先駆的な役割を果たした。
自然環境保全部門	ウチダ イタル 内田 至	75	名古屋港水族館館長	(ウミガメの保護) 昭和30年代からアカウミガメの研究を進め保護のための基礎を築くとともに、具体的な保護活動に対しても国交省・水産庁等の行政や民間保護団体への貢献を含め、多大な実績を持つ。さらに、水族館館長としても、ウミガメだけでなく海棲哺乳類の飼育繁殖についての先進的取組実績がある。

※年齢は平成20年7月1日現在